

天 界

第百三號

(第九卷)

昭和四年十月

花 山 天 文 臺 成 る

(卷 頭 言)

前後二ケ年の歳月を費して計畫建築中であつた我が京都帝國大學花山天文臺が今や完成した。場所は洛東の風致に富む花山丘上、比叡から生駒まで、又、山科から大坂までの景を一眸の下に收め、只、京都市の中央部のみを除外して、東西南北の絶景中に、常緑の松林をぬきんでて銀色に輝やく新しい五層樓の大ドームと其の他の大小建築が立つてゐる。

名は移轉であるけれど、實は創立にも等しい大きさの其の構へであつて、こゝに、ククの30センチ以下の屈折機三臺と、カルブーの46センチ以下の反射機二臺と、グラブの42センチ以下の太陽鏡三臺と、其の他の大小器械が、鏡筒を揃へて、廣々何物にも遮ぎられない天空に向つてゐる。誠に偉觀と言ふべしである。

近時、わが國の天文學界は色んな意味に於いて眼ざましい進展を遂げてゐる。新學者の輩出、新機械の裝置、新研究の發表等、實に賑々しい状態である。しかし、此等の中にあつて、學俗共に目をそば立てる最も著しい事件は有力なる新天文臺の創立であらねばならぬ。こゝに一つの新時機が生れ、又、こゝに新しい學術の力が加はる。國のためにも社會のためにも、はた全世界のためにも大に祝福しなければならない。

しかしながら顧るに今度の花山天文臺の完成は、其の質に於てこそ祝へ、其の量に於いては、實は餘りに聲を大にして誇るには足らざる恨みが無いでは無い。諸機械は皆もこの大學天文臺から移動したもので、其の多くは只中口径のものに過ぎない。歐米の學界に活躍する優秀機に比べるに、なかなか以つて御祝ひ氣分にのみなつては居られないのである。只、此等の機械能力の不足を人の努力によつて補へるだけ補ひ、尙ほ其の上は他日の大發展に待たなければならない。